

# ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ） における利用状況から

徳本 浩子

（The University of British Columbia 日本語講師）

ブリティッシュ・コロンビア大学では、昨年9月から1年生のクラスでICUの『Japanese for College Students: Basic』を使い始めた。12月で1学期が終わり、学期末試験の結果も出た現在、この3ヵ月を振り返りながら、その状況報告をしたいと思う。

## 1. 『Japanese for College Students: Basic』を使うようになった経緯

ブリティッシュ・コロンビア大学（以下UBCと略す）では1980年代初頭から、曾我松男、松本典子著『Foundations of Japanese Language（英文基礎日本語）』（以下FJLと略す）を1年生のテキストとして使用してきた。途中1年間Eleanor Harz Jordenの『Japanese: The Spoken Language』を試験的に使用したことはあるがこれは不成功に終り、基本的に1年生のすべてのクラスにおけるメインテキストは昨年までFJLだった。FJLは1970年代に書かれたテキストであるため、使用単語やアプローチなどいろいろな点で、現在の学生のニーズからの“ずれ”が少なからず出てきており、以前から新しい1年生のテキストの導入の必要性が指摘されていたが、4年間の一貫したプログラムの中での1年生の内容だけを見直すことは難しく、また一方で4年生までの全レベルを見直すとなるとかなりの労力を必要とすることから、例年先送りされていた。しかし、昨年度学部内容の全体的見直しをした際に、この件が再度取り上げられ、この度根本的に1年生のテキストの見直しをすることになった。

さて、なぜ『Japanese for College Students: Basic』（以下JCSと略す）が新しいテキストとして選ばれたかを述べる前に、UBCで使用してきて今まで我々が感じていたFJLの利点、そして問題点をまず述べておきたい。それがJCSを選んだ際の我々の基準の説明とも、おのずからつながってくるだろう。

### 【FJLの利点】

- ① 文法が非常に系統だって導入されている。
- ② 文法の確認の練習問題が各課にある。
- ③ テキストの使用状況設定がカナダになっており、地名などの単語が（バンクーバー、トロントなど）当大学の学生になじみのあるものになっている。
- ④ ひらがなは第1課、カタカナは第5課、漢字は第6課からというように、段階を追っ

て表記法が導入されている。

- ⑤ 導入される漢字の数が210字（読みだけ導入するものを含めても400字強）と少なく、非漢字圏の学生には無理がない。

#### 【FJLの問題点】

- ① その課で導入される文法のパターンに忠実であろうとするあまり、使われる文章が不自然になりやすい。ひいては学生が話したり書いたりする日本語も不自然になりやすい。
- ② 文法事項を、文型のパターンの関連性だけに注目してまとめて一緒に導入しようとするので、学習者の負担の非常に大きい課ができてしまう。例えば、条件節が1つの課ですべて扱われたり、敬語が1つの課でまとめて導入されたりする。
- ③ ファンクションをまったく離れて文法が導入されるので、習った内容が即実践に結び付きにくい。
- ④ 例文やドリルにコンテキストがないため現実味にうすく、学習がドライで不自然になりがちである。
- ⑤ 機械的な置き換えドリルが主で、ロールプレイなどの学生の創造性が発揮できるアクティビティがない。
- ⑥ 読みの練習問題がない。
- ⑦ 英文和訳の練習はあるが、自由作文の練習がない。
- ⑧ 聴解練習問題がない。
- ⑨ サポートとなる視覚教材がない。
- ⑩ 教師用マニュアルなどがいないため、教師が使いこなすのに時間がかかる。

以上のようなことを念頭において、FJLの良い点をできるだけ多く含み、かつ問題点を多く解決してくれる新しいテキスト探しを始めたわけである。新しいテキストを決めるに当たって、いくつかのテキストが候補に上がったが、結局JCSに決まった理由としては次のようなことがあげられる。

#### 【JCSの利点】

- ① FJLと同じ30課の構成になっており、UBCの既存プログラムへの導入がスムーズにいくのではないかとされた。
- ② 導入されている文法項目をチェックしたところ、FJLで導入されているほとんどが含まれているので、カリキュラムをあまり書き換える必要がない。
- ③ 最初から日本語の表記法が導入されている。
- ④ 課ごとに目的とするファンクションが明示してある。
- ⑤ 文法の説明が英語で書かれている。
- ⑥ 使われている文章が自然である。

- ⑦ ロールプレイが各課の仕上げとしてついている。
- ⑧ 読みの練習問題がある。
- ⑨ 作文の練習問題がある。
- ⑩ 漢字の練習セクションがある。
- ⑪ 教師用マニュアルがある。

決まったのがもうほとんど6月と遅く、あまり準備の時間もなかったが、とにかくこういう理由で、JCSを試験的に使い始めて見ようということになった。

## 2. 使用対象

JCSを使用した学生は日本語を第2外国語、および将来の専攻科目として履修しているUBCのレギュラーの学生である。UBCには4年間の日本語専攻プログラム、および大学院の日本語専攻プログラムがある。それにフランス語や中国語とならんで、日本語が第2外国語として認められているので、日本語専攻以外の学生も多く日本語を履修しており、現在のところ、1年生から4年生までの日本語コース履修者は800人にも上る。JCSはその1年生のコースで使用した。

日本語を学習する学生の様々なバックグラウンドに対応するため、UBCの1年生のプログラムには、いくつかの内容の異なったコースがある。基本的に1年生のカリキュラムを終えるには、集中コース（週8時間 x 26週間）で1年、普通のコース（週4時間 x 26週間）で2年かかる。しかしもうすでに日本語の知識がある学生のために、週4時間、1年間で1年生のカリキュラムを終えることができる特別コースも設けられている。ここでいう日本語の知識がある学生とは、高校で日本語を学習してきた者、日系人や日本人駐在者の子弟、日本からのカナダ人帰国子女などのことである。UBCが位置するブリティッシュ・コロンビア州は日本語学習が盛んで、選択外国語の一つとしてハイスクール9年生から12年生まで（日本の中学3年から高校3年まで）日本語を学習することができ、その到達度をチェックする高校日本語統一テストも整っている。

今回は、集中コースと1年目の普通コースはJCSの1巻目から、日本語の知識がある学生用の特別コースは2巻目から始めることにした。普通コースの2年目は、1年目のコースでの成果を見てからということで、今回はJCSの使用を見送った。

## 3. 当初の目標

これまでFJLでは208時間（週8時間 x 26時間）で30課を全部終えていたので、最初、JCSでも208時間で30課のすべてを終えることができるのではないかと期待したが、FJLと比べてJCSは読み物やロールプレイなどのアクティビティを多く含んでおり、同じ時間数ではすべての課を終わらせることは不可能ではないかということになった。そ

れで、当初、集中コースでは第1課から第28課まで、普通コースでは第1課から第14課まで、特別コースでは第11課から第28課までカバーすることを目標とした。

#### 4. 教授法（媒介語、授業形態、評価方法など）

UBCでは基本的に授業の媒介語は英語で、日本語のコースもその例外ではない。1年生のコースの場合、文法などの説明は英語で行い、そのほかのフォーメーション練習やドリルは英語と日本語を混ぜるという形をとる。そして、徐々に使用する日本語の割合を多くしていき、3年生になると授業のすべてが日本語になる。

授業形態は講師と助手（基本的に大学院生）が授業時間を分担するというシステムで、今までは主に講師が文法の説明を担当し、助手がそのドリルを行ってきた。今回はJCSの各課がいくつものパートに分かれているので、その担当分担も大きな課題となった。助手の週あたりの授業担当時間数は年によって大学予算の都合で変えられることがあるが、今年の場合は昨年並みで、講師と助手の担当時間数は約半分ずつになった。

評価方法は今までの普通コースの場合、1学期に中間試験が2つ、期末試験が1つ、口頭試問が1回で、各課ごとに漢字や単語などの小テストを行う。通常1学年は2学期で終わるので、学生は中間試験を4つ、期末試験と口頭試問を2つずつ受けるということになる。期末試験は漢字と作文も含む文法重視の試験で、口頭試問は学生1人ずつに講師と助手がインタビューするという形式をとる。今度テキストは変わったが、試験形式はほとんど変えられなかった。しかし、テキストが変われば当然試験をする内容も変わるわけで、今後試験内容だけでなく、試験方法や頻度についても見直しが必要になってくるだろう。

UBCの場合、カセットテープを使用するテープラボは姿を消し、コンピューターラボがそれに取って変わった。そのため、日本語の学習教材の場合まだカセットテープというのが多いが、なかなかそのテープの使用が難しくなっている。これからの語学教材には、今までのカセットテープのCD化やレーザーディスク化が求められだろう。

#### 5. JCSを使っているコースデザイン

##### 【授業でカバーするレッスン（オリジナル）】

	コースナンバー	1学期	2学期
集中コース	日本語100 & 101	1課～14課	15課～28課
普通コース(1年目)	日本語102	1課～7課	8課～14課
特別コース	日本語104	11課～19課	20課～28課

【1学期が終わって、手直しをしたプラン】

	コースナンバー	1 学期	2 学期
集中コース	日本語 1 0 0 & 1 0 1	1 課～1 3 課	1 4 課～2 5 課
普通コース（1 年目）	日本語 1 0 2	1 課～6 課	7 課～1 3 課
特別コース	日本語 1 0 4	1 1 課～1 7 課	1 8 課～2 4 課

【各課の担当分担（オリジナル）】

セクション	所要時間数	担当者
グラマーノート	2 時間	講師
フォーメーション	1 時間	講師
ドリル	2 時間	助手
リーディング	3 0 分	講師
ロールプレイ	1 時間	助手
ライティング	3 0 分	助手

【1学期が終わって、手直しをしたプラン】

セクション	所要時間数	担当者
グラマーノート	2 時間 3 0 分	講師
フォーメーション	1 時間	助手
ドリル	1 時間 3 0 分	助手
リーディング	1 時間	講師
ロールプレイ	1 時間	助手
ライティング	宿題	助手

6. JCSを使って改良された点

- ① 各課にコミュニケーションに関するオブジェクティブがあるため、その課を終えたらどんなアクティビティが可能になるかはっきりしており、学生にわかりやすかった。
- ② ファンクション重視とはいえ、文法項目もカバーされているので、1 年生が終わった段階で日本語能力検定 4 級程度のレベルに到達するという UBC の目標レベルを落とす必要がなかった。
- ③ ファンクション重視で文法を入れているので、実用的で、実際のコミュニケーションで学生が使いやすかった。
- ④ 最初の段階からリーディングの練習をさせるので、自然な作文を学生が書くようになった。

- ⑤ 早い段階からリーディングとして、ある程度まとまったものを読ませるので、分量をたくさん読むことに対する抵抗が少なくなった。
- ⑥ ドリルにもコンテキストが与えられているので、タスクやアクティビティに現実味がでた。
- ⑦ ロールプレイはチャレンジだが、学生が独創的な会話を楽しんで作るようになった。

## 7. JCSを使う上で問題だった点

- ① 最初から日本語の表記法を導入するのはいいことだが、第1課に入る前にひらがなとカタカナの両方が一度に導入され、そのすぐあとの1課から漢字の学習が始まるので、学生の初期の負担が大変大きい。少なくとも、かなと漢字の導入時期に少し間をあげたらどうか。その負担があまりにも大きくて、今年は初期の段階でドロップアウトする学生が多数出てしまった。
- ② 漢字圏の学生と非漢字圏の学生では、漢字の学習方法もスピードも違うので、漢字のセクションが別冊として独立していれば使いやすい。
- ③ 漢字の導入の際、まだ単語として習っていない読み方まで含めると教えるにくい。例えば、漢字の『一』を教える時、『いち』という単語は知っていても『ひとつ』という単語は知らない場合、『いち』という読み方だけを教えればいいのか。漢字は単語と結び付けて教えるほうが能率がいいように思われる。
- ④ その課までに学習していない未習文法項目が読み物などで出てくることがある。例えば、まだ主語を示す助詞の”が”が導入されていないのに、突然例文として出てきてしまったりする。
- ⑤ コンテキストが日本で、それもICUの学生を対象にして書かれているので、地名などカナダでは使いにくいものが多く（例えば三鷹、吉祥寺など）、また日本へ行ったことがない学生には理解しにくい単語や状況も含まれている。例えば、電車の駅が大きなターミナルになっていて人々が食事や買い物に駅へ出かけるなどということは、カナダではありえない。小さなカフェテリアなどはあるにしても、駅は電車が発着するだけの場所なのだ。また、短距離の通勤電車というものもあまり見かけない。それから、最近では日本食もかなりポピュラーになったが、しゃぶしゃぶと言っても何かなんだかわからない学生もまだ多い。このような場合、口頭で何度も説明するより、ビデオなどで視覚から訴えればたちまちのうちに理解されるだろう。この意味で、特に海外で使われるテキストの場合、視覚教材が大変重要になってくると思う。
- ⑥ 地理的なコンテキストなしで使える単語（家族の名称など）がなかなかでてこない。また単語の導入は、関連した語はまとめて入れたほうが学生も覚えやすいし、こちらも教えやすい。例えば、第4課で家族と子供という単語が紹介され、両親という難し

い単語まで第8課で習うのに、おとうさん、おかあさんというやさしくてよく使われる単語は16課まででてこない。

- ⑦ 新出構文にも多くのバリエーションが示されていて、かえって学生にわかりにくいときがあった。
- ⑧ 文法項目の理解度をチェックする練習問題がない。日本で日本語を学習する場合、学生は実際に習った日本語を教室の外で使って、それが通用するかどうかチェックすることができる。自分の使った日本語で意図するところのタスクができた場合、そこで達成感を得ることもできる。しかし、海外で日本語を学ぶ場合、教室を一步出れば日本語に触れる機会はほとんどなく、自分の習熟度を調べるのは、答えの当否がはっきりする練習問題か、クラスで行われる試験しかない。学生に達成感を与えるためにも、学生の定着度を調べるためにも、何か文法練習問題があったほうがいい。UBCでは、それぞれのインストラクターがその課の内容によって、助詞の穴埋め問題や、英文和訳、和文英訳問題、または動詞の活用問題などの練習問題を作って使用した。
- ⑨ ICUでは文法の説明は極力行わない方針だそうだが、UBCの場合4年で大学院で日本語を専攻することができるレベルにまで持っていく（日本語能力試験1級前後）という使命があり、その上1クラスあたりの学生数も多く（現在1年生のコースの場合、1クラス25人から30人程度）、1年あたりの授業時間数もアメリカの大学などと比べれば少ないことから、文法の説明を英語でして時間のセーブをせざるをえないという状況になってしまった。
- ⑩ フォーメーションとドリルのパートが音声テープに入っているが、これは従来のオーディオリンガル法のテープの方式と変わりなく、もっと聴解練習に役立つような音声教材が望まれる。
- ⑪ 1学期の期末試験の成績を見てみると、FJLの頃と最高点、最低点の点では変わらないのだが、大多数が占めるその中間レベルの学生の成績がFJLの時より伸び悩んでいるように思われた。これは、教師のこの新しいテキストへの未習熟からきているのか、何かほかにUBCのアプローチに問題があるのか、テキストに問題があるのか、その理由ははっきりしないが、これはじっくりと考えて見なければならない現象だろう。

## 8. UBCからJCSへの提案

- ① 漢字の導入を数レッスン遅らせればどうか。
- ② 漢字の練習帳を別冊として作ればどうか。
- ③ 学生の日本語学習を助けるためのビデオやレーザーディスクなどの視覚教材を是非作っていただきたい。その課のスキットや読み物の場面そのものでなくても、その理解を助けるような、日本に関する情報だけでもいいのではないか。疑似日本といった状況

を設定できるようなものがあればありがたい。

- ④ 聴解能力の向上を助けるような、音声教材や練習問題は是非必要だと思われる。
- ⑤ 文法事項の定着度を調べるための、文法練習問題をつけていただきたい。教える教授法、目的などによって、文法練習問題が不要な場合もあるので、これも別冊の問題集にすればどうか。
- ⑥ 音声教材は、カセットテープだけではなく、CDでも出していただきたい。これから北米の大学ではテープラボは姿を消していくであろうし、またテープはその消耗もあまりにもはやいからである。
- ⑦ 関連語、関連字はできるだけまとめて一緒に導入していただきたい。
- ⑧ JCSに続く2年生対象の中級教科書を是非出していただきたい。

## 9. 最後に

以上、ここ3ヵ月の報告を思いつくままに書いてきた。現在2学期が始まってはや2週間になろうとしている。4月になれば2学期を通しての1年のまとめをしないといけないだろう。今年は十分な準備もできぬまま新しいテキストを使い始めるという大プロジェクトに突入してしまったが、来年度は今年の実省を踏まえて、少しでもよりよくこのテキストを使いこなしていきたいものだと思う。